# 古今集冒頭歌をめぐって

安藤重和

## 一

古今集冒頭には、次の歌が置かれている。

ふるとしに春たちける日よめる　　在原元方

としのうちに春はきにけり。ひととせを、こぞとやいはむ、ことしとやいはむ。

この歌を考えるに際し、先ず注目すべきは小沢正夫氏の御指摘である。

ここに歌われた春は暦の上だけのもので、このように季節の風物が全くうたわれてない歌は当時としても珍しい。しかし、巻頭の序曲ともいうべき歌としては、このほうがむしろ好ましい。季節の推移に伴う自然の変化を具体的に表現することは、後続の歌に譲るというのである。[1]

例えば、古今集十一番には次の如き歌も載っている。

はるのはじめのうた　　壬生忠岑

春きぬと人はいへども、うぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ。

この歌では、春の指標として、暦ではなく「うぐひす」の鳴き声を優先している。自然暦による季節認識であるが、冒頭歌にはこうした気配は全く無い。「ここに歌われた春は暦の上だけのもの」という小沢氏の御指摘は誠に鋭い。この点を先ず踏まえておきたい。

## 二

この冒頭歌の解釈については、古来様々な解釈が展開されて来たものの未だ明解を得ていないと思われるが、かつて神尾暢子氏が詳細にわたり諸説を分類整理されているので、ここで諸説の歴史に触れることは控える。神尾氏は、それら諸説を全て否定された上で新見を提示されたのだが、その新見について田中新一氏が「従来の諸注釈」にも目配りしつつ次の如く言及されている。[3]

従来の諸注釈は、第四、五句を二者択一の趣とみなし、第三句「一年を」の具体的内容として、「きょうの日を」（新釈）、「過ぎし日々を」（全集）、「残れる日々を」（集成）と訳出している。いずれも一年（ひととせ）全体を指しているとは見ず、その部分的時期をさしているものとする。しかし、「一年」の指し示す内容が一部分の時期だとするのはやはり問題であろう。

そこで、神尾暢子氏は「一年」を、過ぎし年初より昨日までと、今日より年末までの二期の総体として捉え、前期を「こぞ」後期を「ことし」と呼ぶ試みと理解した（「歳内立春と古今巻頭―王朝の暦法と元方の方法―」『王朝』第八冊　後『王朝国語の表現映像』に所収）。「一年」を部分的一時期とみる従来説の難点を補訂した新説であったが、「一年」の「一」と「こぞ・ことし」の「二」の対応との見方は、既に田中喜美春氏によって批判されたところであり（『文学・語学』第七十七号所収「昭和五十年度学界展望・中古韻文」）、また暦月的二元観という点でも従来説の域を出たものではない。

「一年」は、一部分の時期でも二期の総体でもなく、そのまま「一年」全体を指すと見るべきものであろう。

この限りにおいて、田中新一氏の御説は極めて的確であると思う。「一年」は一部分の時期でも二期の総体でもなくそのまま「一年」全体を指すと見るべきもの、とされる点は当然すぎる指摘とも思われ、議論の余地は無いものと思う。この点も基本事項として押さえておきたい。神尾暢子氏の新見は成り立ち得ない。

## 三

だが、田中新一氏は、これに続けて、次のように自説を展開される。

立春を迎えた今日、この日の属する同じ「一暦年」が、立場を替えることで「こぞ」にも「ことし」にもなるという思いの歌で、同じ「一暦年」が節月意識の立場では「こぞ」に見え、暦月意識の立場では「ことし」に見えるという二元観を打ち出したものである。即ち、「立春ですでに正月（節）になった」という観点から、「この一暦年」は改まったと見、過ぎし昨日までの日々は勿論のこと、今日以降年末までの十二月中の日々をも含めて、すべて「過ぎ去った年」「去年（こぞ）」と言おうか。あるいは「まだ十二月の内である」という観点から「この一暦年」は改まったわけではないと見、過ぎし日々も残された年末までの日々もすべてこめて「進行中の年」「今年（ことし）」といおうか。この二様の認識である。前者は節月観よりの、後者は暦月観よりの認識である。二様の立場から二様の見方が可能になることに着目し、楽しむ思いをはずませてい

る。

この歌の場合、「こぞ」「ことし」の語が対比的に使われ両者の意味の違いが強調されていることに注意が要る。「今日以降年末までの十二月中の日々」つまり現在及び未来に属する時間をまでも含めて「過ぎ去った年」「去年（こぞ）」と言うことなど、いくら「節月意識の立場」を持ち出しても、あり得ない。

## 四

ここで、「暦月」と「節月」について、確かめておきたい。古暦研究の権威内田正男氏は、「暦月」と「節月」の相違について、次のように説かれている。[4]

私達が一か月というときの月は、普通暦月であるが、その他に節月というものがある。

暦月というのは、（天体の）月の位相によって決まる朔日から晦までの、普通の（旧暦の）一か月であるが、（天体の）月とは無関係に、太陽の位置によって決まる節月があることは、あまり知られていない。この節月とは、正月節立春の日から二月節啓蟄の前日までが正月、啓蟄から三月節清明の前日までが二月、清明から四月節立夏の前日までが三月――――というように、節によって一年を十二か月に分けるのである。したがって、節月は太陽暦と同じで、月（天体）の満ち欠けには関係せず、当然閏月もない。

また、氏は、暦月の一年の第一日目たる「一月一日」と節月の一年の第一日目たる「立春」の関係を中心に、次の如く解説しておられる。

陰暦では、朔の時刻を含む日を、暦月の第一日つまり、朔日（ついたち）とし、次の朔日の前日を、晦（つごもり）といった。（略）いま、ある朔の日に始まる一か月が、何月であるかを決めるにはどうするかというと、その二十九日ないし三十日の中に、正月中雨水の日があれば正月、二月中春分の日があれば二月、三月中穀雨の日があれば三月というように、朔から次の朔の前日までの間に含まれる中（二十四節気の内、偶数番の節気の開始時を言う。奇数番の節気の開始時は「節」と言う。―安藤注）によって、暦月の名称を決めるのである。（略）節の方は中と違って、正月節立春といっても正月にあるとは限らない。同じ月名を冠した節と中との間隔は、十五日あまりである。いままで述べてきたように、中（ちゅう）はそれに冠した月の内に必ずあるから、たとえば、正月中の雨水は、正月朔日から晦までのどこかにある。仮に、雨水が元日とすれば、立春（立春第一日の意―安藤注）はその十五日前に当たるから（立春第一日の）名前は正月節でも十二月十五日くらいになるし、雨水が正月晦にあれば、立春は正月十四もしくは十五日となる。したがって、立春は（暦月の）十二月十五日から正月十五日の間にあることになり、平均すれば

元日に立春となるようにできている。（略）十二月のうちに立春がくることを、年内立春という。

つまり、「太陽暦と同じで、月（天体）の満ち欠けには関係せず、当然閏月もない」節月は、「月（天体）の位相によって」「朔日から晦まで」の日付を決める暦月とは大きく異なるものであるが、両者は全く無関係というものではなく、「暦月の名称」は「（節月の）中によって」決められるという関係を有しているということになる。言い換えれば、「太陽暦」たる節月は日付単位で太陽の運行に連動するが、暦月は月単位でしか連動し得ない暦と言えよう。

このように、大きく異なる暦月と節月が、当時、別々の時系列として認識されていたことは、当時の具注暦[5]を見れば明白である。上の段に先ず暦月が示され、線で区画されたその下の段に細字を用いて割り注形式で二十四節気・七十二候・節・中などの節月項目が示されている。即ち、暦月は日付扱いされるが、節月は暦注扱いなのである。当時の暦月中心主義が明らかに見てとれるとも言えよう。

それぞれ異なった時系列と認識されていた両者において、一年の始まりは、暦月に於いては「一月一日」、「節によって一年を十二か月に分ける」節月に於いては「正月節立春第一日」とされていた。暦に関わる限り、一年の始まりはこの二種以外にはあり得なかった。したがって、暦月の「ひととせ」は一月一日から次の一月一日の前日までであり、節月の「ひととせ」は立春から次の立春の前日までである。一月一日から始まって立春の前日で終わる一年や立春から始まって一月一日の前日で終わる一年など、暦を誤解しない限り、暦法上あり得ない話であった。この点も押さえておきたい。

## 五

「ふるとしに春たちける」「としのうちに春はきにけり」とある部分の、「ふるとし」の「とし」及び「としのうちに」の「とし」が、暦月の「とし」つまり「一月一日から次の一月一日の前日まで」の意であることは、もはや定説であり、論ずる必要はあるまい。また、「春たつ」の語が「節月」の「立春」を意味する事についても同様と思う。「ふるとしに春たちける」とか「としのうちに春はきにけり」とか言うのは、暦月では旧年である時期に節月では新年第一日目になってしまったの意であり、この表現の背景には、暦月と節月に対する確かな理解が読みとられる。

田中喜美春氏は、

元方の歌は、「年の内に」と言っている以上、「ひととせ」は、暦年の一年であると解さざるをえない。歳末近くなって、立春を迎え、残る何日かを無視して「ひととせ」と把握していると考えられ、この思考法は、今日でも普通に行われていることである。その「ひととせ」は、暦年で言え

ばことしであるが、二十四節気に従えばこぞとなり、同一時間が相入れない概念で把握できることにとまどいを感じているだけのことなのである。[6]

と言っておられるが、

「年の内に」と言っている以上、「ひととせ」は、暦年の一年である

などとは言い得まい。「暦年の一年」には「年の内」の立春当日は含まれてしまい、「残る何日かを無視し」たとしても、「二十四節気に従えばこぞとな」るとは言えない。この歌が立春当日の詠である以上、その前日までしか「こぞ」とは言えず、立春の当日を含んでしまえば、「ひととせ」は「ことし」としか言い得まい。

最近においても、「ひととせ」を一暦年とする説は比較的多いが、その中で、新編日本古典文学全集『古今和歌集』では、

「ひととせ」は、今年の初めから昨日までの期間。たとえば、十二月二十六日に立春となった場合、その前日までの一年を去年というのか、今年というのかと、問題を提起しているのである。[7]

とされている。「昨日」とは「春立ちける日」の前日たる昨日の意であろうから、節月の「ひととせ」を想定されていると思われるが、その「ひととせ」が「昨日まで」に限定されて今日を含んでいないからには、「去年」でしかあり得ず、「今年」とはなり得まい。

## 六

このように、「ひととせ」を暦月で規定しても節月で規定しても、同じ「ひととせ」が「こぞ」とも「ことし」とも呼ばれ得る期間を想定することは不可能である。手詰まり感が募るばかりとも言えようが、ここで発想を転換してみよう。「こぞ」「ことし」という概念はこの場合矛盾概念であり同時成立は不可能である。

その「ひととせ」の中に詠歌時点たる「春たちける日」が含まれれば「ことし」であるし、その「ひととせ」の中に「春たちける日」が（新年第一日目として昨日までの日々と区分されて）含まれなければ、昨日以前のみが「こぞ」である。要するに、元方は、「春たちける日」で新年になったのかまだ「としのうち」なのか、「春たちける日」で「とし」が区切られたのか区切られていないのか、と質問しているのである。節月ならば区切られるし暦月ならば区切られない。自明のことであるのに、そこを質問している。それは、作者は「ひととせを」と提示しながらそれが暦月か節月かの区別を自らはしていないことを示している。「ひととせ」の終わりについて暦月か節月かの区別を疑問・とまどいに委ねてしまっている作者は「ひととせ」の初めについても一切言及をしていないことに気付くべきだ。この提示された「ひととせ」は、その終わりもその始めも曖昧

にして漠然と「ひととせ」と捉えられた時間に過ぎない。

## 七

その終わりも始めも曖昧にしてなぜ「ひととせ」という概念が成り立つのか。

一月一日と立春正月節は、約三十年に一度の割合で一致する[8]が、それ以外はズレる。だが、「年」のレベルに於いて暦月と節月がズレを見せるのは年末年始に限られ、しかも、内田正男氏の御説の如く「立春は（暦月の）十二月十五日から正月十五日の間にある」から、暦月の新年を迎える一月一日と節月の新年を迎える立春とのズレ幅は最大限半月（精確には二十四節気の一節気分）にしかならない。例えば、延喜四年十二月二十三日が立春正月節であり、節月ではこの日から延喜五年となる。しかし、暦月では十二月のうちはまだ延喜四年のままであり、この段階では節月では延喜五年・暦月では延喜四年というようにズレている。が、間もなく一月一日を迎え、節月でも暦月でも延喜五年となり、「年」のズレはなくなる。次の立春は延喜六年正月四日である。この場合、一月一日の段階で、暦月では延喜六年となるのに節月では延喜五年でありズレを発生させるが、間もなく正月四日に立春正月節となり、暦月でも節月でも延喜六年となって、「年」のズレはなくなる。こうして見ると、一年間の大部分（二十四分の二十三以上）の期間は暦月でも節月でも同一の「年」となる部分である。[9]恐らく、「年」の概念は主としてこの部分によって支えられていると思われる。厳密に年末年始を確認しなければ「年」の概念を使い得なかったというわけではない。

暦月・節月の区別をしない漠然たる意味で漫然と「ひととせ」の語を用いている例を挙げよう。

万葉集二千二百二十二番

ひととせにふたたびゆかぬあきやまをこころにあかずすぐしつるかも

古今集二百七十八番

これさだのみこの家の歌合の歌　よみ人しらず

いろかはる秋のきくをば、ひととせにふたたびにほふ花とこそ見れ

貫之集六十七番

ひととせに二たびにほふ梅花春の心にあかぬなるべし

貫之集に「ひととせに二たびにほふ梅花」とあるのは、冬の時期梅の枝に積もった雪を二回目の開花に見立てたものだが、これらの歌に歌われる「ひととせ」は、暦月・節月の区別など念頭に無い形で漠然と歌われていると思う。他ならぬ在原元方も、次のような歌を歌っている。

後撰集百九番　題しらず　在原元方

ひととせにふたたびさかぬ花なればむべちることを人はい

ひけり

「ひととせにふたたびさかぬ花」とはこの場合桜のことを言っているが、この「ひととせ」も暦月・節月の区別をしない漠然たる意味で用いていると思う。年末年始でもない限り、暦月・節月の区別に頓着しないこの種の用法は珍しくなかった。

## 八

しかし、在原元方は年末年始のしかも節月意識の最も際立つ「春たちける日」の詠に、暦月・節月の区別をしない漠然たる意味の「ひととせ」の語を持ち込んだ。文脈上、「同じひととせ」という同一性の意味までを添えて。

だが、実は、この同一性は、漠然たる「ひととせ」という意味のレベルに於いてしか維持し得ない。漠然たる意味の「ひととせ」は疑問提示の段階でこそ同一性を装うけれど、答えの段階では、「こぞ」「ことし」の語に誘導されて節月・暦月の区別に触れざるを得ず、「ひととせ」の同一性は解体されてしまう。

結局のところ、元方は、

年初以来続いて来たこの「ひととせ」は、立春正月節で区切られたのでしょうか、区切られてはいないのでしょうか。

と問うたのだ。暦月・節月の区別をしない漠然たる「ひととせ」を提示し、その「ひととせ」が暦月か節月かを問うている。

「ひととせ」の期間について、その始まりに関してでも、また、その終わりに関してでも、具体的に言及した途端に、その「ひととせ」は暦月もしくは節月のいずれかの枠内にするりと入り込んでしまい、一挙に「ひととせ」の漠然性が失われて、「こぞ」ではあるが「ことし」ではない「ひととせ」か、「ことし」ではあるが「こぞ」ではない「ひととせ」になりおおせて、肝心の「去年とやいはむ　今年とやいはむ」という疑問・とまどいの世界へ辿り着くことができなくなるのだ。「ひととせ」の具体的時期を特定しようとした従来の研究者達が明解を得なかった所以である。

## 九

神尾暢子氏は、

在原元方の作品「年のうちに春は来にけりひととせをこぞとやいはむことしとやいはむ」という表現は、それ自体を独行させるとき、その立春は、年内立春に定着するとは断定しがたい。新年立春である可能性も、それが、一月一日でなければ、保留されるはずである。暦年の途中に、立春があるのだから、年内立春でなければならず、新年立春は、排除されるということにはなるまい。[2]

と述べておられる。しかし、この歌自体を如何に「独行させ」ても、「年のうちに」という語を新年の時期に使うとは思われず、到底従いがたい。

また、新年立春の場合は、先ず一月一日が訪れ、その後精々十五日以内の短期間内に立春が訪れるわけである。ならば、「一月一日」にその日を新年とするか否かの判断即ち暦月に拠るか節月に拠るかの判断を下しているはずなのに、その後間もない立春の日の段階で暦月に拠るか節月に拠るかでとまどっているというのは理解し難い。

これと異なって、年内立春の場合は、前回の立春もしくは前回の「一月一日」の後に暦月・節月の区別を要しない一年近くの長期を経ているので、その間に暦月・節月の区別に無頓着な日々を積み重ねてしまう。「年のうちに春は来にけり」の「けり」は暦月・節月の区別に無頓着な日々を送っている状態のまま立春正月節に突入し、突入の後に初めてその日が立春正月節である事に気付いたという次第を表していよう。暦月・節月の区別に無頓着な姿勢のまま、節月の新年第一日目に直面し、これまで無頓着に漫然と過ごして来たひととせほどは節月であったか暦月であったかとふと疑問に思った、そういう体の歌である。

注1　小沢正夫氏校注・訳　日本古典文学全集『古今和歌集』（小学館　昭和四十六年四月）六十三頁

2　神尾暢子氏著『王朝国語の表現映像』（新典社　昭和五十七年四月）所収「在原元方と立春映像―歳内立春と古今巻頭―」参照

3　田中新一氏著『平安朝文学に見る二元的四季観』（風間書房　平成二年四月）第三節「『古今集』に見る二元的四季観」参照

4　内田正男氏著　理科年表読本『こよみと天文・今昔』（丸善　昭和五十六年十二月）二十四頁・二十頁

5　陽明叢書『御堂関白記　一　自筆本』（思文閣出版　昭和五十八年七月）など参照

6　田中喜美春氏担当「昭和五十年度学界展望・中古（韻文）」（全国大学国語国文学会　『文学・語学』第七十七号所収）

7　小沢正夫・松田成穂両氏校注・訳　新編日本古典文学全集『古今和歌集』（小学館　平成六年十一月）三十一頁

8　注4書　二十三頁

9　古川麒一郎・岡田芳朗・伊東和彦・大谷光男四氏編『日本暦日総覧　具注暦篇　古代後期　一』（本の友社　平成四年十一月）参照

なお、万葉集・古今集・貫之集・後撰集の本文は、新編国歌大観に拠った。